

村上 慧 『移住を生活する 2014年4月7日～2015年4月16日』

2015年4月17日(金) - 4月29日(水・祝) [*22日(水)のみ休廊]

12:00 - 19:00

※会期中ゲストを招いてのアーティストトークも予定しております。調整中のため詳細は後日公開いたします。

Gallery Barco | ギャラリー バルコ

〒125-0061 東京都葛飾区亀有3-27-27 LA CAMERA 1F

[常磐線(千代田線接続)亀有駅南口よりアリオ亀有方面に徒歩3分]

アーティスト・ステートメント

こんにちは。村上慧といいます。僕は1988年に生まれて、東京都葛飾区お花茶屋で育ちました。2011年には武蔵野美術大学の建築学科を卒業しました。

僕は2014年4月7日から、下の写真のように発泡スチロール製の家を肩に背負って歩き、そこで寝泊りしています。



この生活を送る上で基本的なルールが二つあります。

①夜寝る時に、家を路上や公園等に勝手に置いて寝ないで、誰かの敷地を交渉して借りること。この国では公道に私物を放置すると不法占拠で法律に抵触します。なのでこれまで、お寺の境内や個人宅の庭先やショッピングセンターの駐車場などさまざまな敷地を交渉して借りて、僕の家を「建てて」きました。そしてそれを写真に撮りためてきました。

②なるべくたくさん「家の絵」を描き続けること。僕はこの移動生活の中で、各地に建っている家の絵を毎日のように描いています。有名な古民家とかではなく、普通に建っている家を描いています。

以上二つのルールで移動生活をしています。

2011年の東日本大震災以降、僕はずっと「このまま日常を続けていいのか」という問いが頭から離れません。いつしか原発事故によって放出された放射能を気にしながらモヤモヤと生活することにも慣れてしまいました。慣れてしまった自分は嫌だけど、どうしているかも分かりません。僕は原発事故から、10年前に起きた福知山線の脱線事故を連想します。どちらも、人間が自分で作った道具に殺されたような事故です。

原発反対のデモにも何度か行きましたが、どうも「原発反対」って堂々と叫べない自分がいました。自分にも悪いところがあると思ったからです。これはデモの話ではありませんが、分かりやすい標的を設定し、それに対して「あれが悪い!」と叫ぶことはすぐにできます。でも僕たちはいつも多くの出来事と、様々な人間関係の中でもみくちゃにされながら生きています。社会はとても複雑に関係しあっていて、「あいつを倒せば幸せになれる」なんていうラスボスはいません。「あれが悪い」と何かに対して指した指は、そのまま自分を指してしまう。なので、まずは自分自身の生活を内省的に見直すことから始めないとだめだと思い、この無限地獄から脱出するために発泡スチロールで小さな家をつくり、それを背負って移動生活をはじめました。

原発事故以降の日常には慣れてはいけなような気がする。でもどうやら人はものごとに慣れてしまうようにできているので、「慣れる」ということを受け入れつつも、それでも自分たちの日常を客観視するための方法を考え、実践し続けたいと思います。僕は、それまでの定住生活と距離をとるために、「敵を見定める」ようなつもりで家の絵を描いています。僕が描いているのは土地に固定された家です。それは定住生活の大切な基盤であり、同時に足かせでもあります。あえて悪く言えば、僕たちは土地から逃げられないようなシステムの上に暮らしているんだと思います。福島事故はそれに気づかせてくれました。

この展覧会は、そのようにして描きためた日本各地の「家の絵」と、僕が一年間移動させてきた「発泡スチロールの家」、そしてその家で寝るために借りた「敷地の写真」の組み合わせによって構成され、この社会での僕たちの生活の在り方を相対化するべく企画されます。

また、1年間住み続けてきた最初の家が古くなったため、会期中に2軒目を公開制作します。

展覧会について



このたびギャラリーバルコでは、美術家・村上慧の個展『移住を生活する 2014年4月7日～2015年4月16日』を開催いたします。

村上慧は、昨年の4月7日より、自らの生活に対して《移住を生活する》というタイトルを名付け、手作りの「家」を持ち運び全国で移住を続けながら、各地で建築物の絵を描く生活を送ってきました。今回の個展では、一年の間に描きためられた絵とそれらにまつわる記録を一同に展示し、会期中には新たな「家」の公開制作を予定しています。なお、彼の出身地である葛飾での個展は今回が初めてのこととなります。

1988年生まれ、東京都葛飾区出身の村上慧は、2011年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。在学中より美術家としてのキャリアをスタートし、「松戸アートラインプロジェクト2010」(松戸市)に参加、卒業後は「テラテラ祭り2012」(吉祥寺)、「吉原芸術大サービス」(台東区)、「六本木アートナイト2013」(港区)、「ART PROJECT OITA 2013「循環」」(大分市)、「第13回まつしろ現代美術フェスティバル」(長野市)など、全国各地のアートイベントを中心に、おもにプロジェクトタイプの作品を発表してきました。

村上の作品は、独自の空間やルールを設定し、偶発的な人間関係を生みだすような構造を特徴としています。ときに建築的な手法を用いて他者同士を向かい合わせたり、あるいは村上自身が媒体となり、緩やかなコミュニティを浮かびあがらせることで、「人が人と向かい合う」場を村上はつくりあげてきました。

初期から近年にかけての彼の作品を辿っていくと、仮設空間で持ち寄り鍋をする《松戸家》(2010)や《小平マンション》(2011)といった、新たな文脈のなかでのコミュニティの生成にはじまり、村上自身が社会との接点となって他者同士を緩やかに繋いでいく《引っ越しと定住を繰り返す生活(仮)》、空間とルールを規定することでより直接的に他者同士を向かい合わせる《家主リレー》(2012)、「他人のトンネル」(2013)といった形へと作品は展開していきます。これらの一連の変化からは、作品を重ねるごとに、観客に強い主体性を求め、より具体的な経験をさせるものへと変遷していく様子がわかります。

しかしながら、2013年後半から2014年にかけて、一転して村上の思考は内省へと向かいます。

村上のステートメントでも語られているとおり、それは東日本大震災における原発事故を機に、彼の中に芽生えたわだかまりに端を発しているといえます。そして村上は、それまでのように他者を作品の構造の中に取り込むのではなく、ただ彼自身のみがその構造の内側にいる状況をつくりだします。しいて云うならば、「移住を生活する」とは、彼自身の生活を作品の構造と同一化させることで、そこにいる他者ではなく、世界そのものと美術家である自分を相対化しようという試みなのかもしれません。

終わりのなき「移住」という選択から、彼が何を見て、何を待たのか— その絵や言葉、記録のなかには、一人の美術家の生活にとどまらない多くの示唆を見出すことができるのではないのでしょうか。

この展覧会は、一年に渡る彼の「移住」を概観できるまたとない機会であり、村上作品の根幹ともいえる彼の人間性、そして行為そのものにも触れることの出来る貴重な機会となります。

(新藤君平 / ギャラリーバルコ・アソシエイト ディレクター)

アーティスト・プロフィール

村上慧(むらかみさとし)

1988年生まれ、東京都葛飾区お花茶屋育ち。
2011年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。美術家。

2014年

9月 第13回まつしろ現代美術フェスティバル(長野/長野市)
4月 吉原芸術大サービス(東京/台東区)

2013年

11月 ART PROJECT OITA 2013「循環」(大分/大分市)
3月 六本木アートナイト2013「六本木ヒルズ大型インスタレーション」(東京/六本木)
2月 吉原芸術大サービス(東京/台東区)

2012年

12月 みつける写真道場「みつけるフェス2012」(東京/浅草)
12月 フジテレビお台場合衆国「アーホ」(東京/台場)
10月 テラトテラ祭り2012(東京/吉祥寺)
7月~9月「×日町」(新潟/十日町市)
5月~「くつきハウス」(岩手/気仙地域)
3月 エコ&アートアワード2012 (東京/コニカミノルタプラザ)
3月 ART SYNCHRONICITY展 (東京/トビン・オオハシギャラリー)
2月 シャベリば展 vol.1 (東京/ Island MEDIUM)
1~2月 アートサイト八郷2012(茨城/八郷地区)

2011年

11~12月 飛鳥アートプロジェクト(奈良/明日香村)
9月「引越しと定住を繰り返す生活(仮)in 三宅島」(東京/三宅村)
7~8月 三宅島フィールドワーク
5~6月「引越しと定住を繰り返す生活(仮)」(東京都内)
5月 Knock!Knock! 7人の来訪者来る展(東京/ Gallery 工房 親)
3月 39artists 390pieces 3900yen 展 (東京/ Gallery 工房 親)
2月 わくわくSHIBUYA coordinated by 遠藤一朗(東京/トーキョーワンダーサイト渋谷)
1月 武蔵野美術大学卒業修了制作展(東京/武蔵野美術大学)

2010年

11月 松戸アートラインプロジェクト2010(千葉/松戸市)

〈ウェブサイト〉 <http://satoshimurakami.net>



メディア掲載

TV- 大阪読売テレビ「大阪ほんわかテレビ」、フジテレビの「めざましテレビアキア」
雑誌- 福音館書店「母の友」2015年1月号(岩手滞在時のルポ掲載)
地方新聞- 秋田県「魁新報」、茨城県「朝日新聞茨城版」、青森県「河北新報」など
Web- YADOKARI(<http://yadokari.net>)(コラム掲載)

過去作品(1/2)



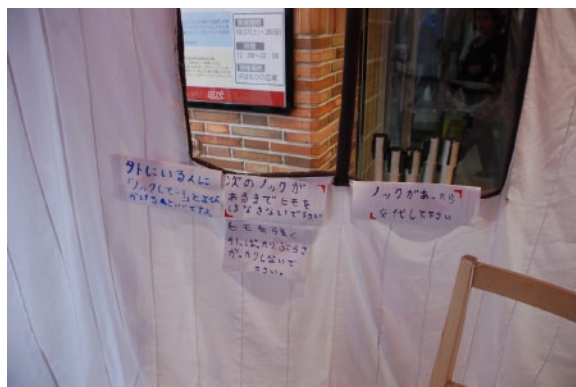
《他人のトンネル》(2013, Roppongi Art night 2013 出品作品)

長さ25mの白い布製のトンネル。その両端から一人ずつ入って、それぞれ反対側の出入口から出る。反対側の人とすれ違うときにどのように振る舞うかは自由だが、その様子は、ライトによってトンネルの壁面にシルエットになって映し出される。



《三角カフェ》(2013, 吉原芸術大サービス-線の上で踊る- 出品作品)

こたつになっている三角形のちいさなテーブルをテントで囲んだ簡易なカフェ。2週間のあいだ開かれた。三角形であるのは、オーナーである村上と客二組が対話に没入しすぎずに1つの話題を共有するため。



《家主リレー》(2012, テラテラ祭り2012 出品作品)

天井からぶら下がっているロープを持っていないと崩れてしまう布製の家を、ノックによって人がバトタッチしながら支えるもの。二日間の会期で延べ700人程の人が参加した。

過去作品(2/2)



《引っ越しと定住を繰り返す生活(仮)in東京》(2011)

約一ヶ月間、東京都内で発泡スチロール製の小さな家を担いで歩き、移動生活を行うプロジェクト。土地を借りた人と「一晩同じ敷地にいる」ことによって、村上は様々な人からそれぞれの人生のエピソードや、地域にまつわる話を聞き出し、それを伝え歩くという作業を毎日行った。



《小平マンション》(2011, 武蔵野美術大学卒業・修了制作展)

武蔵野美術大学の中核部となっている1号館2階窓の目の前に4日間だけ現れた3畳の家。村上が家主となり、食材持ち寄り制の鍋が行われているが、学校運営の中核部で働く職員たちとごく近いところで行われており、訪れた客との「見る・見られる」という緊張感の強い空間になっている。



《松戸家》(2010, 松戸アートラインプロジェクト2010出品作品)

松戸を訪れた全ての人に対して開かれた4畳半の家。村上が家主となり、1ヶ月間の会期中、主に食材持ち寄り制の鍋をやりつづける作品。日が経つごとに「松戸家」は地域にとって、在って当たり前の存在となっていき、松戸の住民によって全く独自のコミュニティがつくられていった。